埼玉学園大学・川口短期大学　機関リポジトリ

Canadian Multicultural Society : The co-living of plural ethnic groups

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2017-08-21
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 内田, 雄一
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/986

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

カナダの多民族社会
―― 民族の共生

Canadian Multicultural Society
The co-living of plural ethnic groups

内　田　雄　一
UCHIDA, Yuichi

Canadian Multicultural Society – the co-living of plural ethnic groups

In the year 2000, the number of international immigrants totaled almost 200 million. In the past century, the world's population tripled, and masses of emigrants left their homelands, not being absorbed in their own countries. In addition, the population in the developing world is estimated to increase to 3 billion in 50 years.

Canada has been seeking ways for its diverse population to coexist with its inherent pluralistic values. The Multicultural Act has its limitations, being accused by some of promoting ethnic isolation as well as national disbanding. However, this legislation should be tolerated because it concerns a totally new, epoque making national policy in the midst of an era of transition of the state of the world as a result of the recent relocation of massive numbers of people. If Canada can be free of German Neo-Nazi skinheads and the issue of Muslim women's headscarves in France, for example, it is thanks to this "slogan" of self-change for a cosmopolitan future.

目次

はじめに
１．移入民
２．「多文化主義政策」
　ａ．反論　中心の不在
　　民族別隔離
　　解体へ
　ｂ．限界
　ｃ．擁護
３．融合
４．「公」の復権
まとめ

はじめに

2000年、国際移民の数は２億人弱といわれる。この一世紀で世界人口は約３倍となり、国内に吸収されない余剰人口が外にあふれ出た。途上国人口は今後50年で30億増とも見積もられている（C.Z.Guilmoto, 2003-12）。主に南からの人々を受け入れた北の国々は、多民族社会となり、同質的な国民国家の運営継続の再考をせまられている。異文化を背負いやってきた数多く多様な人々に、今、かってのような同化政策を押し付けることは無理強

キーワード：国際移民、「多文化主義政策」、「公」の復権
Key words ：International emigrants, "Multicultural Act", Restitution of "Official"

いとなるのではないか。それでもその建前を崩さない仏独のような国もあるし、その一方で、早々と多文化主義を国策として採用し、国民国家「放棄」の賭けに出たカナダ、オーストリアのような国もある。

以下は、そのカナダに見る多元公認社会の諸相である。

１．移入民

1871年、ロシア帝国につぎ世界で２番目に広大なカナダの大地には350万の人々しかいなかった。森林をはじめ鉱山、農作物など無尽蔵の資源に恵まれた国土にはそれを開発する人手が圧倒的に欠けていた。陸続きの隣国アメリカが主にヨーロッパから渡来した人々により着々と国づくりを具体化しているとき、カナダのほぼ全域がまだ未開の原野でしかなかった。無限大の処女地に人影はほとんどなかった。国の形を整えるため、まずなによりも人が必要だった。人であればだれでもよかった、とさえいえる。カナダは移民国家を余儀なくされていた。移民募集の大キャンペーンを開始した。

1871年から1971年までの100年間に、国民は当初の350万人から2150万人へとふくれあがった。まずは大成功だった。政府が用意したリクルート用パンフレットには、広々とした緑の沃野の描写はあっても、厳寒凍土の文字はなかった（D.Stoffman. 2002,- 39）。「頑健な妻と半ダースの子を連れた屈強な農夫」（ibid）が大歓迎された。入国には英語もスキルも不要だった。このほとんど無条件の市民権取得はついこの前の1980年代後半まで続いた。身体ひとつに多量のドルをそえてもって行けば、なおさらのことオーケーだった。友人の台湾系カナダ人、エレンの母の英語理解力はほんのすこし、父はゼロだったが、実業家一家ということで全員がカナダ人になった。

総人口が3100万に達してなお、カナダ政府は、毎年25万人の移民を受け入れている。人口比当たり、米国の２倍である。1980年前後から非白人の移入民が増え始めた。1996年、バンクーバー市では外国生まれの移民が市民の44.9%を占め、アジア系が34%を記録している。

移民の大量受け入れを続けている過程で、受け入れの是非が問われる事例がすくなからず出てきた。国の生産増のため迎え入れた外国人が技能をもたないため、さらに移民を必要とする。1991年入国した移民のうちスキルを身につけている者は23%しかいなかった（D.Stoffman, 2002.- 184）。教育不足からかれらの50%以上が貧困層にランクされ、社会保障給付の世話になった。この種の移民は社会にとってマイナスでしかない、との政府批判が当然出てきた。

この急激な異邦人の大増加は言葉のみならず、外見、肌色の違いのほか、宗教、衣服、食事、男女の行動パターン、生活習慣において多様な相違を街風景のなかにもちこんだ。相互に未知の価値観が、生活信条が隣合わさり、ときに、衝突することになった。恒常的な人手不足からほとんどの人が合法的な滞在資格を得て、不法滞在者が、米国にいるとされる800万人に比べれば、非常にすくないのがせめてもの救いだった。それでも住民の間に不安が広がり、英仏系の白人主流派のなかには「古き佳き昔の日々」を懐かしむ者がすくなくなかった。

この異なる人種、民族の同居、交差が人々の想いを困惑させ、かれらから安堵感を奪い、かれらに緊張感を強いるようになったのも自

然の成り行きだった。1882年の昔、ブリティッシュ・コロンビア州在の白人３万人が、２万４千人にまでふくれあがった中国人の存在に脅威を覚え、1885年、移民規制の法案提出へと動き出した、こともある（H.Con, 1982.- 49）。新来者を前にした旧移民のうちに反移民感情が頭をもたげてくる。2002年、相対的に安い移民雇用で利益をあげているはずの工場経営者でさえ、その54%が移民は受け入れすぎと断じたそうだ（D.Stoffman, 2002.- 176）。

２.「多文化主義政策」

1971年時点ですでに総人口の４分の３近くにまで減っていた英仏系人口は、その後、ヨーロッパからの新規移民を数多く迎え入れることは至難と判断した。国が頼るべき移民は、かってベン髪を下げていた苦力たちと同郷の中国人、豚肉を食べず一日５回の礼拝を教条とするアラブ人、熱帯のカリブ海に浮かぶちいさな島々に生まれ育った肌色の黒い人たち、ではないのか。ちいさなひっつめ帽子の下にひげもじゃの顔と黒衣に包んだ身体のユダヤ教の男たちはもうすくなからず入ってきていた。このあとさらに増えるのではないか、白ターバンをきっちりと大きく巻いたシーク教徒の大柄な身体が、ひとりでは外出を許されず、年長者の身内につきそわれ、スカーフをかぶり伏目に歩くイスラムのご婦人方の姿が、炎暑の砂漠の熱風に肌を焼かれた西アフリカの農民たちの群れ、が。

英語を母国語としなくてもキリスト教文化圏に生まれ育った白い肌の人たちが、以前のように大挙して来ることはもうない。それぞれの歴史、文化背景に育まれ、表現し、楽しみ、働くことが同じでない人たちが大勢押しかけてくる。この異邦人たちを相手にするとき、相互に生じる隔たりをどう埋めていけばいいのか。同じ街に暮らしているとはいえ、たぶん職場を除き、彼我を分け隔てている距離を縮める努力はしなくてもいいのか。人々との接点を役所だけに任しておいていいのか。差異がわが身に無害である限りにおいて、そのちがいに目くじらを立てることもない。しかし、移民が欧米型の人権に違反する生活習慣を身内に実行しようとするとき、ヨーロッパ流の人を尊ぶという考えに慣れた人たちは抗議の声をあげざるをえない。

異郷からきた男女と一緒に共生するためには、相手と自分がもっている生き方の違い、価値観の相違に、どこでどう折り合いをつけたらいいのか。共生には接点が必要だ。その接点はいたるところに数多くあるのが望ましい。が、それが難しいとなると、どのような接点が考えられるのだろうか。

1971年、時の首相ピエール・トルドーは多文化主義政策の導入を決定した。その前の60年代に高まりを見せ始めた、フランス語系ケベックのナショナリズムがカナダの国家統一をゆさぶっていたときであった。ほかの多民族国家ベルギー、イギリス、ロシアなどでは国内民族問題がくすぶっていた。西アフリカでは大国ナイジェリアが、部族離反運動がジェノサイドをひきおこし、世界の非難をあびていた。こういった背景のなかで、この民族多元政策は、多種多様な、ときに正反対な行動パターンをもとりかねないエスニシティグループが、相互に紛争をおこさず、カナダでの共存生活を享受できることを目的としていた。

国民は、それぞれの文化遺産を保存し育て上げる権利を有するという点で、全員平等で

あり、政府はその個別な営みを支援する。これまでの、国家はひとつの同質的な価値を共有することで成り立つ、としてきた国民国家の在り方とは対照的な国家アイデンティティの定義であった。異質価値の共生を最終目的とした、いわばサラダボール、モザイク社会建設のための青写真であった。もちこんだ民族の特性を維持し養育する移民グループは、ちがってはいても、たがいに他グループの文化遺産の存在を認め、オーケストラよろしく、皆で、ちがう楽器を奏でながら、協和することでひとつの曲を演奏し、ひとつの調和ある国、社会を運営していく。指揮者は、各パーツが逸脱なく全体のよりよいパーフォーマンスに貢献できるよう配慮し、演奏の成果に責任をもつ。単に同居しているだけではない、各人が自分のパートを持ち寄り、皆と渾然一体となる、というのがこの考えの最終ゴールであった。

各民族共同体の個別性を公に承認し、その共同体の共存、集合をもってカナダ国家とするこの多文化政策は、人類史上きわめてユニーク、先見の明ある現実重視策との肯定的評価から、「無邪気、ナイーヴなフォークロア」（N.Bissoondath, 1994.- 42）との否定的論議まで、数多くの議論の的となってきた。

ａ．反論

中心の不在

多文化主義批判の急先鋒である、トリニダッド島出身のビスーンダッツ氏は、自身をカナダ人とと自認した上で、カナダの基本的な弱点のひとつはカナダという国が固有の意味をもっていないことだ、という。世界各地から数多くの移民を受け入れた後、建国以来の英系支配は終わり、中心がうつろになってしまった。

カナダ人としての自覚、誇りはなにに根ざしているのか。フランスと密な血縁関係にあるケベックは別として、英連邦の一員ながらカナダはイギリスとは一線を画したい。しかし、歴史の浅い若い国には世界に誇れるオリジナルな文化遺産がない。偉大な王朝が育てる統治システム、人間学や世界観の構築などが不在だったので、その力の表象を欠いている。ヨーロッパ各地域にある城、大聖堂、中国の紫禁城、日本の法隆寺なども見ることができない。観光ショウには先住民のインディアン・ダンスが出てくる。過去の輝き、歴史の重圧が欠けている。カナダでは過去が自分をつくってくれない。指標になってくれる国産のご先祖様がいない。だから、人は過去にとらわれることなく、自由でさわやかでもある。権威的押し付け、傲慢な自己主張、理論の空回りなどに苦しむことも少ない。けれども、カナダ人意識の拠り所があいまいだ。他国に比べ、権力の集中、モラルの規制、コンセンサス、求心力がすくないから、でもある。アメリカにある世界資本主義、国際政治の中心という自負、自信も欠いている。

多文化主義政策をもってその空虚を埋めようとしたが、まさに多文化の公認が愛国心育成の障害となっている（N.Bissoondath, 1994.- 75）。食いぱっぐれた外国人がたくさんやってきた。カナダは急場しのぎの公衆便所のごとくとなってしまった（ibid, 133-4）。愛国心はパスポートどまりか。カナダ国籍を与えられながら、最大の関心は自分の出自グループと親族にあって、カナダは２の次ぎ、３の次ぎなのだろう、ある中国系女性は「（総人口3100万の）この国には東京の人口しかいないのよ」と言った。日本の首都についての関心

が母国について、を上回っている様子だった。国が国民の意を十分結集することができない。この政策は、多様な移民を助けこそすれ、国民の結集を妨げ社会の結合を脅かしている、というわけである。国民のうちに共有の「われわれ」が希薄である。相手を問わない無償のボランティア活動の育成も容易ではない。

多文化主義政策がカナダの中心の不在を加速している、というビスーンダッツ氏の見解は、すくなからぬ他の論客の意見をも反映している。中核がないこの国で、この政策は統合、一体化の必要性に逆行している（R.W.Bibby, 1990.- 137-148）。この文書には統一についての表現が不十分である（D.Stoffman, 2002.- 127）。政府のこの決定は国民をさらに分裂させ、共通モラルの基準を破壊し、コンセンサスの欠如を高めた（J.Mensah, 2002.- 209）。エスニシティの持続と強化はエスニシティ共同体相互の連絡と統合に矛盾する。多を認め、同時に、１にまとまれ、とは多民族国家につきまとう難題のひとつだ。この政策の推進者であったトルドー首相の考えのなかにカナダ一体化への想いがなかったとは考えにくい。仏系カナダ人が集うケベック州の度重なる分離独立運動に業を煮やした首相が、ケベックをほかの民族集団と一律に同じレベルにまで引き下げてしまおう、との魂胆がこの政策を生んだのではないか、とのうがった意見もある。

民族別隔離

ビスーンダッツ氏ほか何人もの著者が書いている。

「国籍はどこですか」ときかれる。「カナダです」と答えると、相手は当惑して、「いや、その、本当の国籍はどこですか」と。「本当の国籍がカナダです」。

カナダ人、という答えが通りにくくなったのも、民族性重視の腹立たしい結果ではないのか、とカナダ生まれ、カナダ育ちの中国系ネイスンは憤っていた。ビスーンダッツ氏自身も、20年来カリブの故郷には帰っていない、トリニダット島の問題は今自分の問題となっていない、それでも、質問者は島の名前を聞き出すまでは満足しない（N.Bissoondath, 1994. - 25）。そして、もうカリブ人ではなく、また、カナダ人とも認められない自分には帰属先がない。各自が先祖伝来の文化集団に分類区分されいるこの国は、民族と無関係な個人の自立を認めないのだ（ibid, 211-2）。そして、知り合いのインド系移民の言葉を引用している、「カナダ人になるためであって、一民族のラベルを張られるためにカナダに来たのではない」（ibid, 220）。

ここから、民族別隔離ゲットー、という表現が出てくる。

多文化政策は、異文化への無関心を生む、ということにもなってしまう。そのエトゥノセントリズムは、一部の野心的為政者にはときに好都合かもしれないが、結局ブロック化にほかならない。共存、 共生の最終目標に逆行する「たこつぼ」状況を生み出している。外とは最小限必要なコンタクトだけを保ち、自分たちの民族遺産を抱え込み、ということは、周囲との相違、差異を解消することなく、分断状態のうちに孤立を続けることになる。

「同じカナダ人でありながら、われわれパキスタン系と中国系の人間はおたがいに没交渉のままだ。この状態がこのあと何年も続くのだろうか」（D.Stoffman, 2002.- 150）。自文化の尊重が異文化の共有に優先しているとき、人はちがう相手に自分を合わせる努力を怠り

がちだ。自分を変える必要もない、変えてはいけないという信条もある、このままでいいのだ、と。民族共同体の戸口は異民族の立ち入りに笑顔をもっては開かれない。自宅のドアを開かない人は他人の家のドアをノックすることもまれだろう。自分たちのエトゥノ「ゲットー」のうちに自己隔離した人々の間には不寛容の空気が漂う。

解体へ

一度インプリントされたイメージが抜けきるには長年月を要する。20世紀も後半になると、人種平等論が普及し、アメリカでは公民権運動が盛んになり、人権会議ほかが世界中で相次いで開催された。人種差別主義は反時代的、無知蒙昧の同義語となってきた。人種問題には理解あるとのポーズを示す必要が出てきた。依然として反移民感情を引き継いでいる白人は、愛想良く如才なくふるまう「ほほえむ差別主義者」と呼ばれるようになった。移民嫌い、人種的偏見はふっしょくされたかに見えたが、その実は、家のドアの向こう側に、親密な内輪の私的空間のうちにひっこんでいる。多文化主義の国策がこの内外分けの正当化に使われている。諸民族共同体はたがいに相容れない特性をもっている、それゆえ、社会の安泰のためには無理に交わるよりは分化している方がいい。「るつぼ」よりは「モザイク」とされる所以である。自分は自分、相手は相手である。

1993年、カナダ有力紙がおこなったアンケート調査の結果、回答者の72%が、各民族グループのアイデンティティは、アメリカにならい、全体に吸収されるべき、との意見だった。多文化モザイク方式は、結局、機能せず、人種、文化の「るつぼ」様式を採用すべし、とビスーンダッツ氏は述べている（N.Bissoondath, 1994.- 1）。「るつぼ」の本家アメリカでもうこの仕様が、ことに対黒人関係において、ゆきずまってしまっていることを熟知したうえでも、諸民族の溶解を希求せざるをえないのだろう。一見太平無事のカナダ社会は表面下において分解し、分裂し、分断された人々は半永久的な孤独のうちに生きている、ということなのだろう。

日本人女性を妻として、アジアに親しみをもっている英系の友人は、アジア系の人々から逆差別を受けている、仲間に入れてくれない、とこぼしていた。いよいよ、ハッカー、シュレジンジャー、ハンチントンらアメリカの現代論客が憂えている人種別によるアメリカの分裂の兆しがカナダにも出てきたということだろうか。ビスーンダッツ氏は、カナダ国内で黒人だけの美人コンテスト、有色人種だけのスポーツ大会、作家会議を組織したら、どういうことになるか、と述べている（N.Bissoondath, 1994.- 190）。アメリカですでに実現ずみの黒人学校と大学、黒人教会、黒人専用のリクリエーションセンターのカナダ版である。非白人による白人への差別である。こうなると、移民というよりは植民者である。非現実的な話ではあるが、ケベック州に加えて、ちいさな黒人だけの自治州をひとつ考えるということになるのか。民族別コミュニティが発達しているカナダでは、自分たちだけが集う教会でのミサ、会食会、週末ピクニックなどが目白押しにある。「棲み分け」である。そこでは白人も参加をやんわりと断られている。「ほほえむ人種差別」である。非白人の側からの「異なる権利」の行使である。

カナダはさらに亀裂を深め、解体に向かう

のだろうか。それも多文化主義という、解体回避を目的とした国策のせいで。

b．限界

多文化政策には限界がある、のも事実であった。民族独自の文化を認め、その育成を発展、奨励するとまで言いながら、世界各地から移民が大量に入国、という現実に直面したとき、民俗文化のうちに含まれる多種多様な風俗、生活実態のすべてを公認し、ましてやその強化を支援することなどとてもできなかった。この政策を決定したとき、その担当者たちは、諸民族が継承してきた文化遺産の、ケースによっては突飛な、承服しがたい内容をどこまで事前に想像、理解しえていたのか。人手、人材を確保する、という至上課題を達成するためのキャッチフレーズを織り込んだ綱領だったのかもしれない。かっての人種差別的事例と袂をわかった理解ある懐の深さ、人道的包容力と映った文言は人寄せのためだったのか。

どこまで実行可能かと思わせる理想主義的な内容ではあるが、この条例はたしかに時代を先取りした魅力をもつマニフェストではある。が、マニフェストはスローガンでもある。目標の具体化実行部隊である国民の意識と最終到達目的との間に横たわるギャップを埋める作業には時間がかかる。その間、規定が現実との間に生ずるズレに耐え、両者の距離をすこしずつ縮めていくのは、そのズレを生きる人がもつ寛容度、包容力の大きさではないのか。いくつもの異文化がもつ複数の異質を、ひとつの同居社会のなかですべて肯定する、といったことができるわけがない。カナダの多文化政策とは、この不可能への挑戦であり、共生のための共通分母探しという試みのひとつである。まだ試行錯誤の段階にあると思いたい。

異なる文化背景を背負った人々が一堂に会して共生していくためには、さまざま生じるチグハグをどう解決していったらいいのか。

バンクーバーの韓国料理店にやってきた韓国人が、メニューを見て、多文化主義をとっているのになぜ犬料理がないのか、とたずねた、という（D.Stoffman, 2002.- 119）。本当にモザイク社会なら、ソマリア人は麻薬をたしなめるはずだ（ibid, 121）。ジャマイカからきた親は、本国でと同じように、子どもを鞭打つことができる（ibid, 123）。数多くの祭日が宗教に関わりをもっている。カナダではキリスト教の聖日が公の休日になっていて、ほかの宗教の聖祭日は無視されている。この不公平を解決するため、あらゆる人々の宗教祭日を公の祭日とすれば、暦は祭日、休日だらけとなってしまう。逆に、イースター、クリスマスなどキリスト教関係の祭日を全部取り除いたら、今皆が共有している年間の祝祭、休日がなくなってしまう（W.Kymlicka, 1998.-48）。平等原則を当てはめ、現在カナダに居住している200以上の民族ごとに一日を祭日と取り決めれば、カレンダーは公休日で満杯となってしまう。

伝統文化は信仰と結びついているケースが多いので、民族衣装はしばしば宗教的意味をもっている。政教分離の建前から、と、イスラム教徒の婦人がスカーフ着用ゆえに法廷から退去を命じられたことがあった。また、シーク教徒がターバンを巻いているとの理由で公会場への入場を拒否されたこともあった。それならば、法廷で宣誓時に使う聖書も禁止すべきではないのか。公立校でのクリスマス・コンサートもあまりに非キリスト教の生

徒への配慮を欠いているのではないか（N.Bissoondath, 1994.- 46-50）。日常生活の隅々にまで宗教が入り込んでいる場合、異文化との出会いは異宗教同士の遭遇となる。いずれの信仰者にとっても、志をまげることは棄教を意味する危険につながる。

多文化主義の限界が多く露呈するのは、イスラムという異文化の生活様式と対面するときである。豚肉を食べる食べない、アルコールを口にするしない、は個人の嗜好の問題であり、それも、当人にとり有害な行為ではない。宗祖アリの苦難を共有するため、血だらけになるまでわが身を鞭打つ、という一部シーア派の年中行事が公共の場で公開されたら、行政はどう対処するだろうか。しかし、一夫多妻、とりわけ、アフリカのイスラム圏によっては今なお当然と実施されているクリトリス・カットとなると、非イスラム教徒にとり、これは許しがたく、多文化のひとつとして放置もできない異端の奇習である。人権というすべての人間に普遍的な基本権利への侵害蛮行として、この切除を犯罪と告発せざるをえない。そして、事実、重婚と女性性器カットは禁止されている。ユダヤ、イスラム教ほかで実行されている男性の割礼は黙認されている。比較的広範囲に受け継がれてきた「文化」のひとつとされているからなのだろうか。

多文化主義が国策のひとつとして施行されているカナダで主流派を構成しているのは白人である。ヨーロッパ中心主義と批判されても、判断の基準はヨーロッパのキリスト教モラルにもとずいている。多元文化の尊重を公言しても、その複数のあり方を許容する範囲は基本的にイギリス、ヨーロッパの伝統的価値の枠内においてである。それゆえ、ヨーロッパ型の ――美しすぎる言葉だが―― 人間性最優先という基調の外にあるものと出会ったとき、多文化主義は失効する。

c．擁護

この政策は、当然、全能ではない。いくつもの課題をかかえながらも、もしこの対策がなかったら、を想定すると、この施策の肯定サイドがいくつも浮かび上がってくる。政府の介入がなければ、黒人への人種差別はもっとひどくなっていただろう（J.Mensah, 2002.- 204）。エチオピア出身のタクシー運転手は「すくなくとも、あからさまな差別はない。われわれ外国暮らしをしているアフリカ人にとって、ここは天国にいちばん近いんじゃないか」とまで言った。西ヨーロッパ諸国は知りたがっている、人口比当たりはるかに多くの移民を受け入れながら、なぜネオ・ファシストたちの騒ぎがおきないのか、を（W.Kymlicka, 1998.- 6）。

宗教が政治と合体し、かって重厚な王朝の歴史、文明圏をきずいた、という過去の栄華をいまだ肌身につけている人が過去のない若い国カナダにやってくる。そこは「軽い」国だ。権威、戒律、階級が希薄な、中心不在の重みのない社会だ。支配と被支配、搾取と非搾取という、歴史上、世界のいたるところで繰り返されてきた当然の苛酷さもこの北の国にはあまりない。イスラム、ユダヤのほかシーク、ヒンズー、オランダ系のメノナイト教徒の人々などは、圧倒的な強権を欠いたこの国で、自分たちの信仰ルールを容易にまっとうできると思った。どうしても自分を他に合わせなければならないという思いももたないですんでいる。自己変容など無用だ。

多文化主義政策の賢さは、このような自文

化意識過剰な人たちに、あらかじめ道を譲り、城の外の大半を明け渡してしまったことだ。政府は、それぞれの文化遺産に敬意を表し、その高揚のための支援を惜しまない、と、これから来るだろうえらく志操堅固な面々にも、下手でに出るという離れ業をやってのけてみせた。自国内にかれら用の「解放区」を設け、摩擦すくない穏便な多民族社会の運営に成功している。ドイツのスキンヘッドもいなければ、フランスの「スカーフ事件」もおきないのだ。

確かに、人類の歴史のなかで多文化容認が実施された統治ケースはすくなからずある。しかし、19世紀に同質的国民の統合が国家成立の条件として一般化されたあと、20世紀の後半に、必要に迫られたとはいえ数多くの異質な民族の共存を持って国家の要件とするというカナダのケースは、先進国において、初めてであった。国家形成の実験である。人の国際大移動に合わせた、これまでとは異なる国家統合のモデルが成功するのか失敗に終わるのか、答えを出すのはまだまだ先の話だろう。未来を先駆けるこの政策は、もしかしたら「国家の解体と国家の時代の終焉を予告している」（西川長夫、2001-398）のかもしれない。

いずれにしろ、今のところこの新しい事態にさいし「すべての問題解決の方程式」または「万能薬」（W.Kymlicka, 1998.- 48）はない。分断、孤立、孤独ほか多くの不満表明、批判はありながら、それでも、市民の80%がほかの国に移住するつもりはない、カナダに残り続ける、という国民の高満足度がこの国の秩序と安泰を支えている。なによりも、ここには ――新聞が総じてつまらないほどの――平穏と豊かさがある。

３．融合

この先行き、移民による多民族国家はどうなるのか。国民の分化がさらに進み、モザイクの一枚一枚が結びつくことなくその数を増やしていき、そのあげく、国家は分解、解体の破局へと落ち込んでいくのだろうか。そうはならないだろう、という現象が進行中である。白人主流派にみずから同化しようとする人々が現れてきた、また、カナダ生まれ、カナダ育ちの移民第２、３世代以上のなかから、自分が受け継いだ文化遺産を部分的に放棄し、民族間交流をはかる若者がすくなからず出てきた。

ほとんどすべての移民が、３、４世代を経ると当初の文化的特徴を失い、同化されていく（Todd, 1999.- 88）。同化か隔離かのいずれか、と問われれば、最終的には同化（ibid, 28）と、フランスの人口学者E. トッドは断定している。民族間の摩擦は同化へと向かう過渡期におこる現象だ。トッドは同化と隔離の最終決定要因を民族固有の融合体質いかん、としているが、あえてそこに至るまでの誘因を探れば、それは当然経済的な豊かさ、快適さ、利便であろう。そしてそれを集中してもっているのは繁栄を謳歌している先進国である。世界の大勢は、その享受のあり方に異議を唱えても、実用性、便宜を否定することは難しい。豊かさを求めて、が今世紀さらに活発となるだろう民族移動の主動因である。

母国でマイノリティの地位にあった人は打たれ強い。カナダに来てマイノリティになっても、それは先刻承知の上だ。かれらは、ふつうの人の倍働かないと人並みの収入にありつけない、移民の文句は通らない、移民に甘えは許されない、と、まず現地に受け入れら

れるための努力をする。仲間うちに閉じこもっていては誤解や不信感を招くばかり、と、積極的に英語を学び、仕事場では忠勤を励んだ。自国の文化に距離をおいて、新天地の人々の生活を取り入れるよう努めてきた。

大方の移民２世、３世は、民族性尊重を掲げる政策を評価しつつ、自民族の枠を乗り越え出た。親が与えてくれた教育をとおし、英語によるコミュニケイションとカナダ理解を得て、街と職場を自分の生活領域としていった。家族とすごすよりも仕事とそれに連なる仲間とすごす時間の方が多くなってきた。その結果、英仏語を除く祖父母の言葉を理解する３世はついに１％以下になってしまった（D.Stoffman, 2002.-132）。共通の言葉を手に入れた若者は共通の機会と場を広げていった。セクショナリズムにも多文化主義にもかかわらず、同化は進行中である。分化、分裂、解体、崩壊といった一連の分析、お先真っ暗な未来学はマゾヒスティックな杞憂にすぎないのかもしれない。

1991年、カナダ人の98.6%が英仏語のどちらかを話す、と答えている（W.Kymlicka, 1998.-19）。英語を介して交流の輪は民族を越えて広がった。多様な出会いの場が増えた。若い男女の相互関心は活発となり、視野は拡大し、興味はおのずと異世界に入っていった。各民族の聖域である家のドアは開かれ、家族のうちに招き入れ、招かれるようになった。ふたつの民族にまたがる交婚に向けてである。民族融和をすすめるもっとも具体的な絆が結婚であろう。民族間の相互理解がどこまで可能かを測る「同化の最終テスト」（M.A.Richrd, 1991-20）である。ヨーロッパ内出身者のケースだが、子どもの交婚についてをたずねたら、1969年、ギリシャ系の73%、スロバキアの52%、オランダの11%が反対だったが、その10年後の1979年には、各々56%、１%、６%に減っていた（J.R.Burnet, 1988.-98）。親の世代が民族のアイデンティティに固執しなくなってきている。

カナダは、さらなる民族体の縦割り固定によって解体していくのではなく、もっとも具体的には交婚により、民族体そのものが融解し、多混血の新カナダ人の登場をもって世界でもトップレベルのコスモポリタン国家へとまとまっていくのではないだろうか。

たとえ万が一、多文化政策が多様な移民を分断するために賢く偽装された国策（N.Bissoondath, 1994.-43）であったとしても、国民はプライベートな意向から相互に結びつきを深めていった。多文化間の相互同化であった。個別、対立する多文化ではなく、ひとりのうちに融合する多文化であった。現在の2.5人当たりひとりの民族融合は、もしかしたら、あと20年後、ほとんど全員が非純血になっているかもしれない。カナダとは文字通り多民族国家であり、カナダ人とは多民族、多人種の合体である。同じ調査で出身民族をカナダ人と答えた者の割合は、単一、複数選択合わせ、1986年の0.5%から20年には39%へと大幅に増えている（http://12.stat.can/english/census01/Meta/ethnic.cfm）。国政担当者の喜びに輝いた笑顔が目に見えるようである。

国家は同質の国民に拠らずとも成立しうる、と遠からず公言できるのではないか。多文化モザイクは徐々に多民族の「るつぼ」へと移行していくのだろう。「るつぼ」の溶解はどこまで進むだろうか。アメリカで「るつぼ」が大きくつまずいたのは国民の12%以上を占める黒人の存在であった。カナダでは1996年、2.01%のみである。ゆるぎなき宗教文化のゆ

えに同化困難と思われている最大の民族集団イスラムの人たちが、アメリカで総人口比１％を割っているのに対し、カナダではここ10年間で倍増し、2001年、２％を占めるにいたっている。

公がマイノリティの個別文化を尊重する一方で、私的レベルで民族の融合が進んできた。文化背景を異にする国民が、多文化政策が柱とする民族カラーの維持、育成を横目に見ながら、勝手に手をつなぎ、自分のカラーを後生大事とする代わりに、混成からなる国の規範、融合体としてのカナダ人になることを選択しつつある。純粋マイノリティの減少、混成マジョリティの増加である。現在合わせて国民の４％を占める黒人とムスリムが、いつの日か多文化主義政策の最多の対象となるのだろうか。

４．公の復権

今のカナダ国民の在りようは「主流派」と「るつぼ」と「モザイク」に３分割されている。そして、このあと可能性として、「モザイク」は「るつぼ」に、「「るつぼ」は「主流派」へと移行していくのではないだろうか。民族大移動の21世紀に入った今日、アイデンティティはひとつに固定されていない、すなわち、民族性は変質をせまられており、ということは、特に民族国家はその在り方の変容を避けることがむずかしい、ということになる。

前出の2001年調査によると、国内に200をこえる民族グループがあり、国民の４割がそのひとつ以上のグループの出と自己申告し、そのかたわら、別の４割がカナダ人でもあると自己を規定している。残りの２割だけが、カナダ人ほかの複数民族カテゴリー以外の、単民族集団の出身者ということになる。全員カナダ市民ながら、意識の上で、カナダ人４割に対し非カナダ系６割、という国民構成になる。

国である以上、無数の「私」の上に、公準としての「公」が不可欠である。幸いなことに、現状のカナダは、諸大名の連携の上にかろうじて乗っかっていた室町幕府よりはるかに有効な治世のための共通用具を備えている。公用語は英仏語だけであり、公教育はこの両国語のどちらかをもって行われる。公用語をなくしたら、公祭日廃止同様、無数の民族語がとびかい、収拾がつかなくなる。大混乱、無政府状態を避けるためには、法律を統一し、教育制度を定め、度量衡を決め、車両の通行は右側か左側かのどちらかに確定しなければならない。たとえば、刑法の分野では、シンガポールで合法的な鞭打ち刑をどうするか。男女別遺産相続権についてのイスラム法にどう対処するのか。裁定基準として登場するのがヨーロッパの人権思想である。

移民である以上、先着支配民が設定したルールに従わざるをえない。まず公用語を学び、知識、理解力を養い、技能を身につけて公職に就く。ヨーロッパスタイルの学校カリキュラムに沿い、評価され、卒業資格をとる。良い成績をとるためには、暗記、寡黙、遵守だけでは不十分、創造性、発言、批判力を誇示しなくてはならない。協調重視より個性発揚のほうを白人が高く評価しているならば、力点を移し、その教育システムの枠内に入り、大学を卒業し、必要とするなら上の学位を狙う。このすべてを西欧の制度に従い、努力する。

来る者は拒まず的な移民様様の時代は終わりつつある。毎年25万人の受け入れ枠を設けてはいるものの、ここ数年、英語とスキルあ

る者を優先、と移民選抜を採用している。選び抜かれて入ってきたすでに高教育を受けた外国人は、比較的容易にカナダ人となっている主流同調派の数を増やすことになる。新カナダ人の増強がヨーロッパ中心主義の「公」を強化する。「私」の願いは「公」により迷惑をかけられないことだ。迷惑をかけないための多文化政策である。民族共同体が国を分裂させるほど強い自己主張をしないかぎり、政府は多文化を容認できる。西欧が主体面して非西欧を客体扱いしないならば（前川啓治、2004、62-3)、また、非西欧が西欧という主体に対置する頑なな主体とならないならば、両者はおだやかに共存できるだろう。カナダ政府は文化多元政策の適用を続けていくだろう。英仏を中心とする主流派層を増やしながらも、アメリカ、フランス、ドイツに比べれば「ちいさな政府」として多様な国民にひとつのお手本、ガイドラインを示して、多価値をまとめていくだろう。その過程で、隣の兄貴アメリカの苦渋、 四苦八苦、大西洋をこえた彼方で、時代ずれした「一にして不可分」をあいかわらず国是としているフランスの困惑、難渋がいくたの有益な示唆を与えてくれる。

21世紀、人の移動はますます活発になる。カナダ政府が採用した政策は、各国が指針を考える上で貴重な参考具体例となる。守るべき枠組みを提示しただけで、数多くやってきた異邦人に優先権を与え、この国の文化をそれぞれつくって下さい、と言えたのはカナダが最初であった。同質的な国民で固め、固有の民族文化をゆるぎなくつちかってしまった国家は、カナダの対極にある。それでも人のグローバリゼーションは21世紀避けがたい課題のひとつである。国の立場、環境はずいぶんとちがっても、カナダに兄事することには大きな意味がある。

ま と め

実に世界人口の３％ほどの人々が、今日、母国の外に移民として暮らしている。そして、今世紀その数は、増えこそすれけっして減ることはない。押しかけてくる人たちに国境を閉ざす国が増えてきた。2001年、４ケ国に１ケ国ほどの割合だ（C.Z.Guilmoto, 2003-85)。そのなかには、すでに入国済みの移民が、家族を呼び寄せて、異国のただなかにそれぞれ多くの自国文化圏をつくっている国もある。その一方で、カナダのようにあいかわらず毎年25万人の移民受け入れ枠を設けている国もある。国境を閉ざした国も開いている国も、受け入れ側は異文化との共生になんとしても努めていかねばならない。

19世紀から21世紀にかけて、世界の主要な関心は階級から移民に移行しつつある、といわれる。この最新の人の動きが、脱国民国家をうながし、新しい共生モデルの形成をうながしている。多文化主義が、同質的先進国家にとって、ひとつの「自己改革のスローガン」（小倉充夫、1997-27）となっている。

主要参考文献

Reymond Breton (1990), *Ethnic Identity and Equality*, University of Toronto Press.

Carl E.James and Adrienne Shadd.Ed, (2001), *Talking about Identity*, Between the lines.

Reginald W.Bibby (1990), *Mosaic Madness*, Stoddart.

Jean R.Burnet (1988), *Coming Canadians*, MacClelland and Stewart.

Madeline A. Richard (1991), *Ethnic Groups and*

Marital Choices, UBC Press.
Daniel Stoffman (2002), *Who gets in*, Macfarlane Walter and Ross.
Joseph Mensah (2002), *Black Canadians*, Fernwood Publishing.
Harry Con (1982), *From China to Canada*, MacClelland and Stewart.
Will Kymlicka (1998), *Finding our way*, Oxford University Press.
Niel Bissoondath (1994), *Selling Illusions*, Penguin Books.
Christophe Z. Guilmoto et Frederic Sandron (2003), *Migration et Développement*, La Documentation.
篠原ちえみ 『移民のまちで暮らす』社会評論社 2003、
サミュエル・ハンチントン　鈴木主税訳 『文明の衝突』集英社　1998.
同上 『分断されるアメリカ』集英社　2004.
前川啓治 『グローカリゼーションの人類学』新曜社 2004.
小倉充夫編 『国際移動論』三嶺書房　1997.
西川長夫 『国境の越え方』平凡社　2001.
同上　　『地球時代の民族＝文化理論』新曜社 1995.
アーサー・シュレジンジャー Jr. 都留重人監訳 『アメリカの分裂』みすず書房　1988.
エマニュエル・トッド　石崎晴己、東松秀雄訳 『移民の運命』藤原書店　1999.